

(別紙様式 小中学校用)

平成22年度指定 新しい職を活用した研究モデル校 研究報告書

学校名 高知市立高須小学校

学校長名 吉倉 和子



1 研究テーマ	学校を内・外にひらく主幹教諭の働き －組織の活性化と教育の充実を求めて－
2 研究内容	<p>(1) 組織の活性化のために、主幹教諭はどうあればよいかについて実践的に追究する。</p> <p>(2) 本校教育の充実のために、主幹教諭はどうあればよいかについて実践的に追究する。</p> <p>(3) 対象業務は主に、危機管理・安全教育、PTAや地域との連携・情報発信、学力向上とする。</p> <p>①危機管理や安全教育の充実</p> <p>②PTA活動や地域活動と教職員を結び、教育をより豊かにする取り組みを推進</p> <p>③算数の指導方法工夫改善及び学力向上を図る取り組みを推進</p> <p>④校務全般について、教頭を補佐し、教職員を助けることにより学校運営の円滑化を図る</p>
3 新しい職の配置による組織体制	組織の改善点や現在の組織体制等
4 新しい職の活用状況	①主幹教諭の担当職務、校内での位置づけ及び活用状況等

- ・運営機構に准管理職として組み入れる。(企画運営委員会、研究推進委員会に参加)
- ・研究 A (学力保障部), 研究 B (健康安全部) に所属
- ・担当教科等 5年算数 T T (週13時間程度)
- ・クラブ活動 (ドッジボール) 担当

- ・教頭を補佐し、学校運営の円滑化を担う。
- ・各部、各学年と連携調整を行い、職員会の計画を立てるなど、運営や研究の推進役を果たす。
- ・主幹教諭の働きにより、これまで本校において十分でなかった領域の充実を図る。  
<特に充実させたい領域>  
危機管理・安全教育・地域連携・情報発信・学力向上

## 5 具体的な取組

### <危機管理・安全教育>

- ・主幹教諭が中央で開かれた研修会に参加したり、地域の消防署から防災について情報収集したりした。それをもとに学校安全についての校内研修会を行った。危機の予防及び危機管理のプロセス・学校危機への対応の共通理解を図った。
- ・日常的に、救急車を要請したときの職員の動きや、火災警報ベルが鳴ったときの動きなど、様々な学校危機に応じ、そのレベルを意識しながらその時に応じた対応を提案していった。

### <地域との連携・情報発信>

- ・「開かれた学校づくり委員会」や「学校保健安全委員会」やPTA役員会に参加するだけでなく、子どもに関わる地域の行事（防災訓練・よさこい祭り）などに参加し、地域の活動と学校の活動を結びつけた。
- ・学校の活動を「子ども高新」に投稿するなど、地域への広報活動を行い、地域の学校への関心を高める取り組みを進めている。

### <学力向上>

- ・学力テスト・到達度把握テスト・単元テストの分析をし、重点単元を決め年間計画の中に組み込んでいった。また、指導方法工夫改善として、教材・教具作り、ノート指導など提案して、担任と協力し個別指導や少人数指導を行い、児童の学習への意欲化につなげた。
- ・放課後学習室の児童の様子を各担任やTT教諭に伝え、放課後教室と学級を繋ぎ、少人数指導を進める等して、学力向上に取り組んだ。

## 6 研究の成果

### (1) 学校安全教育の充実と危機管理意識の向上が見られた。

- ・南海地震・火災などの防災意識を高める教職員に対する校内研修を行った。様々な立場で地震の時に対応するシュミレーションを行い、児童の安全を最優先の判断尊重を確認した。
- ・避難訓練と同時期に児童向けの安全教育を行い、児童の避難方法の意識が高まった。実際に地震が起きた時すばやく行動し、避難訓練が役に立ったことを実感していた。
- ・今年度は4月に児童の水難事故を経験し、全校で命の学習や水の事故への学習を年間通じて進め、防災意識を高めていった。事故後のケアに配慮できるよう連絡や報告会を持つようにした。こうした取り組みの中心的な役割を主幹教諭が担ったことにより、学校運営が円滑に行えた。

### (2) 地域行事への参加や情報発信がふえ、連携が深まった。

- ・主幹教諭が率先して地域行事に参加したり、学校内外の人脈をつくり結びつけたり、新聞への投稿を促進したりすることにより、学校の動きを地域の人々に広く知らせることができるようになった。

### (3) 学力の向上に寄与した。

- ・学力保障部の提案に加えて、指導教諭からも、定期的に学力向上に関する提案を出していくことにより、教職員の意識も高まり、授業改善に活かされている。
- ・放課後学習室の児童の中には、意欲的に学習する児童が増えた。担任と放課後教室の担当とつなぐことで、算数の計算力が向上してきた児童の報告もあった。

(4) 学校運営が円滑に進むようになった。

- ・主幹教諭が各部と連絡調整をよく行い、職員会の計画をたてることにより、会の運営が手際よく計画的に行われるようになった。
- ・多様な校務に、管理職としてのまなざしが行き届くようになり、より組織的に学校運営ができるようになった。

## 7 課題の考察

主幹教諭の果たす役割は学校によって異なるかもしれないが、いずれにしろその担う領域は広く、また、重要な位置づけとなる。

本校では、今年度初めての主幹教諭の配置で突然にモデル校となったこともあり、当初は主幹教諭活用の校長ビジョンを明確に示すことができなかつた。本校では教頭2人制でもあり、業務分担については、主幹教諭や教頭とともに、慎重に定めていったという経緯がある。そうした中で教頭業務を分割するのではなく、教頭が2人いても十分でなかつた領域について教育の充実を図るべく仕事内容を決定した。

教頭や教務主任、研究主任のそれぞれの職務とどう連携していくのか、どのようなスタンスで関わるのが望ましいのかについて、まだまだ十分に整理しきれていないことが課題である。

それにも関わらず、本校主幹教諭は、学校の現状に即し、より必要とされる領域での活動を自己課題ととらえよく動いてくれ、その成果は大きい。

一年を振り返って、校長・教頭に次ぐ管理職として、主幹教諭のしめる職責の重要さと有り難さを痛感している。また、その活用の仕方により教育効果も大きく異なることを2年間の研究モデル校となった他校の実践から伺い知ることができ、そこに、教頭とは異なる主幹教諭の職務の可能性・活用の面白さがあると感じた。

次年度からは、さらに教育効果を高めるために、確たるビジョンを持って主幹教諭の活用をしていきたい。

ただ、この先、主幹教諭が一般的に配置されるようになるならば、教頭職に次ぐ管理職としての、一定の業務内容を規定して示しておいた方がよいのではないかと考える。初めて昇任した主幹教諭が、これまでの勤務校を離れて新しい勤務校に赴任した場合は、管理職と教職員との調整役を果たすことが難しいと思われるからである。

※ 各欄は、必要に応じて広げてください。